米大統領選最終局面

アメリカの変容と行方

対談 古矢 旬（北海商科大教授） × 松尾 文夫（ジャーナリスト）

接戦が続く米大統領選（11月6日投開票）は3回目の討論会を終え、バラク・オバマ大統領（民主党）とミット・ロムニー前マサチューセッツ州知事（共和党）の対決が最終局面を迎えた。選挙戦から見える米社会の変容やその行方とは。アメリカ学会会長の古矢旬・北海商科大教授と、1960年代からアメリカの政治外交をウオッチするジャーナリストの松尾文夫氏に語り合ってもらった。

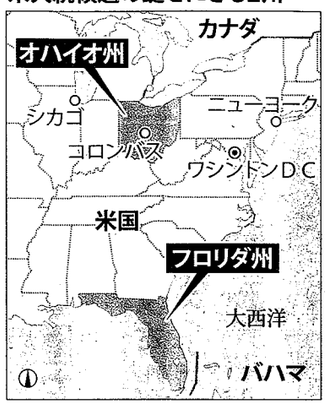
【司会・岸俊光東京本社学芸部長、構成・手塚さや香、写真・梅村直承】

激戦州の情勢

――お2人が激戦州を回った時の印象をまずお願いします。

古矢氏　共和党の全国大会（8月27～30日）は、党内右派とロムニー候補との意見の調整が進んでおらずやや不協和な印象があったのに対し、民主党全国大会（9月4～6日）は政権擁護で一致団結し、その結果、9月初旬はオハイオ、フロリダなどはオバマ氏有利でほぼ固まったように見えました。ただし両党大会ともに将来の新しい米国像を打ち出せず、後ろ向きかつ内向きの印象はぬぐえませんでした。9月11日、（米国人4人が死亡した）リビアの米領事館襲撃事件が勃発し、それと前後してアラブ諸国で反米デモが起こり、共和党がオバマ氏を弱腰と批判したことによって、初めて外交問題に光が当たったといえます。

米大統領選の鍵をにぎる2州



松尾氏　私は今年も選挙戦の行方を決めるとみられるオハイオ州を9月中旬、取材しました。2004年以来3回目です。コロンバス市では両党の本部も訪問しましたが、自動車部品産業の活性化で失業率が全国平均を下回っていることもあり、オバマ氏優勢を感じました。テレビ討論の前でしたが。

――そのテレビ討論ですが、1～3回をどう総括しますか。

古矢氏　今月初めの1回目の討論会がロムニー氏の圧倒的優勢に終わったため、この選挙戦の潮目がある程度変わりました。ロムニー氏の健闘で共和党が息を吹き返し、接戦の様相を呈しています。ただその後2度の討論会は、オバマ氏の優勢に終わり、勝利のために決定的に重要とされるオハイオ州などでは、かろうじて現職が優位を保っている状況のようです。

松尾氏　テレビ討論が昔のような影響力をもつのかは、疑問視する人もいます。ソーシャルメディアの力を重視する人たちですが、この点でも選挙の結果は注目されますね。それから、オハイオで気になったのは、本来は中道派であるロムニー氏が党内団結のために、ティーパーティー（茶会運動）など保守層に人気があるライアン氏を副大統領候補に選んだことに、本来の共和党主流派が違和感を示していたことです。

古矢氏　例えば、共和党保守派は医療や福祉は国でなく州の管理の下で民間が主導すべきだと主張してきました。彼らが医療の「社会主義化」と酷評する「オバマケア」（10年医療保険改革法）は、実のところロムニー氏がマサチューセッツ州知事として導入した制度に似ています。自党内の保守派を離反させないために、ロムニー氏は「オバマケア」を否定しながら、自らの政策は擁護するという、難しい論議を展開しなければならない。

松尾氏　大きな政府か小さな政府かでこれほど対立するのは、レーガン氏が民主党のカーター大統領に勝った1980年の選挙以来でしょう。連邦政府の役割をめぐる対立は建国以来ですが、久々に大統領選の明確な争点になった。私たち2人が、オハイオ州で会ったティーパーティーのメンバーは「政府はどんなに小さくても悪いことをするものだ」と言っていました。

古矢氏　あの人たちの主張は確かに、政府の大小というよりは「制限政府論」ですね。独立宣言に記された「生命、自由、幸福追求」の権利は、人が神から与えられた金科玉条であり、いかなる政府の行為もそれを侵すことは許されないという主張です。

オバマ政権の4年

――初の黒人大統領、オバマ氏の4年間を評価すると？

古矢氏　2008年のオバマ氏当選は、疑いなく50～60年代の公民権運動の結実です。しかし表に出ない人種間の緊張は、今も米政治の底流をなしています。共和党保守派を中心とする強烈な反オバマ運動の根底には、やはり人種差別を感じざるを得ません。それは、オバマ大統領の指導力に対する重大な制約要因となっています。例えば現在、米国流格差社会の貧困層の多くは有色人種です。しかし、大統領としてのオバマ氏はそれを表立って人種問題とは指摘できない。全国民の大統領を標榜する以上、人種差別に対して「怒れる黒人」というイメージを喚起するような言説は慎まなければならないからです。現在のオバマ批判論者の多くは、こうした弱みを知って利用している。問題の本質は、「社会主義的か否か」ではなく、「人種間の対立か寛容と共存か」です。しかし、そのように明言したり、人種差別をあからさまに批判したりといったことを、オバマ大統領は自制せざるをえないのです。

松尾氏　今度の選挙は黒人が再選されるかというテストでもある。オバマ氏再選が実現すれば、人種の多様性が大統領制にも定着するという意味で、米国の歴史にとっても大きな意義をもつと思います。

――オバマ氏とロムニー氏の内政、外交の違いは何ですか。

古矢氏　将来の社会イメージが全く違います。オバマ氏は、米国をヨーロッパのように政府の制御により、格差が小さく、公正な国にしたいのだと思います。共和党保守派と結んだロムニー氏は、やはり民間主導と市場競争を重視するリバタリアン（自由至上主義者）と言えます。外交面では、3回目の討論でロムニー氏は、オバマ氏に歩み寄るかのように穏健な対外方針を示しました。これはおそらく共和党内のネオコン（新保守主義派）など対外強硬派の主張とは食い違いますね。

松尾氏　ネオコンは多数派にならないと思います。ロムニー氏は選挙戦では対中強硬論を展開していますが、中国とのビジネス経験もあり、政権を取れば対応が現在と変わることはないはずです。それに共和党には、中国と関わりが深いキッシンジャー元国務長官もいます。それよりも日米同盟については、どちらからも議論が出てきませんでした。沖縄の基地問題など日米間の懸案は一切、選挙戦で取り上げられていません。この現実を知っておくべきです。知日派が払底し、同盟は形骸化しつつあります。

選挙戦の熱気

――大統領選の鍵をにぎるのは何か。今回の選挙戦から米国の行方をどう予想しますか。

松尾氏　私は失業率など経済動向が大きいと思います。9月の失業率が8％を切り、住宅市場も復調に転じたことが、実績不足のオバマ氏再選をぎりぎりのところで支えていると思う。

古矢氏　共和党は今回負けると打撃が大きいでしょう。ヒスパニックが増え、若い世代が民主党寄りになると、共和党の支持基盤は縮小してゆくことになります。この人口動態に対応できそうな共和党の穏健派は、レーガン時代から後、大きく弱体化しています。

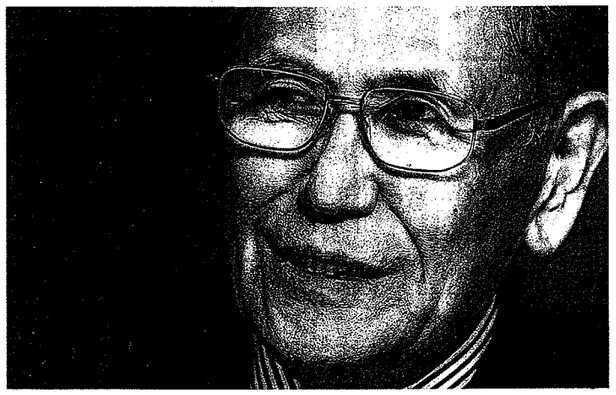
松尾氏　同感です。それにしても選挙にかける米国のエネルギーは、同盟国である日本人に計り知れないものがあります。米国とは頑固なまでにいつまでも民主主義の原点と向き合う、「若い国」だと思います。

古矢氏　そうですね。米国の大統領選には、下から積み上げてきたエネルギーを一気に解き放つダイナミズムがあります。党大会も選挙運動も、一定のルールに従って民主主義を実践するという理念を体現しています。日本の民主党代表選や自民党総裁選には、米国の党大会のような熱気は感じられませんでした。

人種間緊張 現職の指導力制約

ふるや・じゅん　1947年生まれ。東京大博士課程中退。米プリンストン大で博士号。北海道大教授、東京大教授を経て現職。著書に『アメリカニズム』、『ブッシュからオバマへ』など。

政府の役割 久々争点に



まつお・ふみお　1933年生まれ。学習院大卒。元共同通信ワシントン支局長。著書に『銃を持つ民主主義』（日本エッセイスト・クラブ賞）、『オバマ大統領がヒロシマに献花する日』など。